



2017  
年度  
えんだより

社会福祉法人 恵泉福祉会  
光の子保育園  
園長 長島 博樹

## 主 題 不思議

### 月のねがい

- 神さまが創られた自然の不思議さに目を止め、関心を持つ。
- いろいろなものを使って遊び、興味や関心が広がる。
- 生活の中で、予想したり試したりする。

### おことば

互いに親切にし 憐れみの心で接し、神がキリストによって下さったように許しあいなさい。

(エフェソの信徒への手紙 4章32節)

## 行 事 予 定

- 6 月
- 01日(木) 歯科検診 9:30~
  - 06日(火) 「森の日」
  - 08日(木) 尿検査(二次)
  - 10日(土) 保育参観
  - 20日(火) キャンプ説明会 詳細はお手紙をご覧ください。
  - 23日(金) 七井戸公園遠足・ランチデー



- 7 月
- 01日(土) 6・7月生 誕生会・大掃除
  - 07日(金) 「森の日」・FUNFUN
  - 12日(水) ランチデー
  - 12日(水)~14日(金) 4・5歳児サマーキャンプ
  - 20日(木) ゴスペル練習①



## とうちゃん讃歌

5月終わりから6月にかけて、小学校へ入学した卒園生たちの運動会が行われ、光の子の先生方は各学校を回り、卒園生達の活躍ぶりを観戦してきました。いつしかO先生が始められたこの観戦は、他の先生方にも受け継がれ、少しでも成長した姿や高学年のリレーの選手になって走る姿に触れ、確かな子ども達の成長を喜び合うひと時です。私もクラスを担っていた時代がありましたが、在園児の発表会にお呼ばれしていくことはあっても、卒園生の運動会全学校に足を運ぶことなど考えたこともありませんでした。去年は、市川まで通う我が家の子ども達の観戦にまで来てくださり、光の子育ちの我が子たちは、O先生の姿を見た時の喜びようは大変なものでした。

小学校の運動会で、もう一つ目にしたのは「おやじの会」に入られ、駐車場係や用具がかりで活躍する卒園生のお父様方でした。自分の子どもの為だけではなく、共に育まれている子ども達に「育ての心」を持って今も活躍されている光の子卒のお父様方や、また週末、野球やサッカー、ラグビーなどを通して子ども達の成長の為ボランティア指導されているお父様方に、父の日を前に称賛を送りたいと思います。

こうして、「育ての心」の熱い先生方や保護者の方々と共に、光の子たちは暑い夏を迎えようとしています。「育ての心」について、倉橋惣三がその著書に述べています。

育ての心。そこには何の強要もない。無理もない。育つもののおおききな力を信頼し、敬重して、その発達したがの途に遵うて発達を遂げしめようとする。役目でもなく、義務でもなく、誰の心にも動く真情である。

しかも、この真情が最も深く動くのは親である。次いで幼き子等の教育者である。そこには抱く我が子の成長がある。日々に相触る子等の生活がある。こうも自ら育とうとするものを前にして、育てずしてはいられなくなる心、それが親と教育者の最も貴い育ての心である。それにしても、育ての心は相手を育てるばかりではない。それによって自分も育てられてゆくのである。我が子を育てて自ら育つ親、子等の心を育てて自らの心も育つ教育者。育ての心は子どもの為ばかりではない。親と教育者とを育てる心である。

—「育ての心」上— 倉橋惣三 著

このように子どもの育つ力を信じる中で、親も保育者も育ち合う関係を「共育ち」と表現されます。子ども達が、様々な考えや感じ方をする友達と一緒に育つ中で、影響を受けたり与えたりしながら豊かに育ち合う関係も「共育ち」と言いますが、そればかりか子どもが育つ過程で、大人も多様な考え感じ方、新しい価値観を子育てから与えられ、育ち合う関係が含まれています。ここには大人の自分勝手な利己主義的(自分だけの利益、幸福、快楽を求めて、他人や立場を全く考えない態度。エゴイズム。辞典参照)から目が開かれ、大人も子どもと共存する存在として、謙虚さと高尚さが鍛えらえる成長過程が示されています。

「共育て共育ち」という本で、東京大学大学院教育学研究科教育学部教授の汐見稔幸先生は「鳩の森愛の詩保育園」(横浜市戸塚区)の保育を紹介しています。この本を6月の保育参観に向けて購入するきっかけとなった理由は、汐見先生が次の幼稚園教育要領保育所保育指針の改定に携わり、乳児保育の重要性を盛り込まれたことを、より具体的になる参考書を探していたことありますが、<鳩の森>の紹介文を見て光の子の保育感や考え方に

よく似ていたことに興味を抱いたからでした。

この本の中に、親子遠足について書かれている個所があります。

大人も子どもも殻を脱ぎ捨てる、楽しいゲーム三昧の午前中が終わると、思い思いの場所に家族ごとにお弁当を広げる。春の日に優しくつつまれ、心地よい疲労と空腹を覚える体に、和やかなお昼のひと時が染み渡る。

親子遠足は(鳩の森)の保育理念＝「共育て共育ち」をより多くの保護者にわかってもらいたい、クラス内だけでなく園全体の親や子に、お互いに出会ってほしいという気持ちで職員がスタートさせた。けれど、保育園入園したて、あるいは転園したばかりの保護者にとっての4月末「貴重な日曜日の日を、何も毎日通っている保育園の子どもや職員と一緒にいなくても…」と参加を渋る保護者は少なくない。また、転園してきた子どものお父さんの中には、「保育園の行事はお母さんばかりに違いはない。目立っていやだ！」という人もいた。

そんな時は、保育者による”一軒一軒電話作戦”が展開される。親子遠足がどんなに楽しいか、子ども達がどんなに楽しみにしているか、翌日の子どもの目の輝き、園という場を離れて、時を一緒にしたい気持ち…。中には『電話がかかってきたから仕方なく…』という参加者もいるかもしれない。

それでも、朝9時に集合して、いくつかのゲームに歓声を上げるうち、知らず知らずのうちに、”殻のようなもの”をぽろっと脱ぎ捨てられるようなのだ。大人になって、社会に出て日々仕事に追われていると、思いっきり笑ったり歓声を上げたり、走ったり踊ったり、そんな機会はそうそうあるものではない。

けれど、子どもたちも保護者も保育者たちも、みんなで一緒に育ち合っていくには、誰しも本音で語り合う時を持ってこそ、そんな、とことん”語り合える”気持ちを持つためには、「楽しかったと思える体験を持つこと。保護者と保育園との出会いの場、「親子遠足」。そこから、子ども達と保護者と、そして保育者の、新しい”〈鳩の森〉のとき”が始まる」

共育て共育ち 鳩の森愛の詩保育園一編 汐見稔幸-監修 小学館

いかがでしょうか？光の子と似ていると感じる保護者の方も少なくないのではないのでしょうか。また、運動会はこう書かれています。

〈鳩の森〉の運動会の一番の特徴は、お父さんパワーが炸裂すること。毎年運動会の打ち上げ会で飲んだビールの勢いを借りてか、誰かしらお父さんの一人が翌年の実行委員長に名乗りを上げる。そして、集まった十数名の実行委員が6月最初に開かれる、運動会実行委員会からスタートし、キャラクター、スローガン決定、プログラム作成、近隣へのお知らせ配布など、当日の会場設定、用具出し入れ、競技進行、音響ほとんどすべての進行役を担っていくのだ。〈鳩の森〉の運動会は、お父さんたちの力なくしては開けない。

特徴的なのは、0歳児組にもちゃんと出番がある事。〈鳩の森〉運動会の狙いは2つ。

一つは、「自分の子どものことだけではなく、他の子ども、全部の子どもたちの成長をお父さんお母さん、皆さんに見てほしい」そしてまた、「全員が集う運動会であれば、お互いに飛んで走って応援して、そんな中で交流の時を持ちたい。」その象徴が、オリンピックのフィナーレのように700人の大声援で盛り上げる対抗リレー。子どもも大人も、一緒になって走る走る。今年も大歓声の中、お日様組が優勝した。バンザイ、お日様組。

今年も、光の子祭りの為に、本間後援会会長は近隣へのご挨拶を済ませていただきました。

子ども達がふところ深く育っていくには、保育園のみならず、家庭での親と子の間にも豊かな文化が必要だという直感みたいなものが共有されている……

そう考えると、生活の中で、料理などは最高の culture ということになるし、歌をみんなで歌うことや遊びを創造するするのもまぎれもない culture となる。

子どもを育てていくのは、親や保育者の言葉かけや働きかけなのではない。子ども自身が、こうした意味での culture=文化に出会い、自分でその文化をわがものにしようとして活動すること、あるいはその文化を享受することなのだ。その意味で、豊かな文化なしには子どもは育たない……。

家庭の団欒とか、支え合いとか、遊びの創造とか、あるいは季節の行事を祝うとか、料理を創りにぎやかにいただくとか、ときどき家族ハイキングに行とか・・・そうした活動を意識的に大事にしているかどうか。残念ながら、それが今、家庭に次第になくなってきている。そして家庭の文化が貧困になればなるほど、子育てに困難が増して行く……

そんなことを言っても無理だという事ぐらいわかっている。そうではなく、保育園に子どもを預けている以上、保育園がまず文化を豊かにし、それに親・保護者が巻き込まれていく関係を築くことができれば、家庭は自ら文化的になっていく。そう感じて行動しているのだ。だからだろう、<鳩の森>では行事を保護者と一緒に創ってこうとすることが実に多い。日頃の保育の中心は遊びだが、時には親が参加しなければ出来ないような遊びをうまく考えだす。お泊り合宿などがその典型だ……

それが<鳩の森>のやり方だとあきらめて(?)巻き込まれていくうちに、やがて忘れかけていた身体ぐるみの文化への共鳴・共振の気持ちが親自身の中に活性化しているのを感じ、得したのは自分だと思えるようになるからだ、と思う。行事がある度に、まんじゅうを作り、そばを打ち、焼きそばを作る。そういう中で食文化への関心が親たちに確実に育っていく。無農薬の野菜を現地から送ってもらって園で食べさせていると聞けば、どの親だって家庭の食に意識的になるのだろう……

保育園というのは、親がみんなでワイワイいいながら支えていき、その親自身が見返りに子どもを育てる力を持つように訓練される場所だ。そのキーワードは文化。これが<鳩の森>が発信し続けてきたことの一つだった。

共育て共育ち 鳩の森愛の詩保育園一編 汐見稔幸一監修 小学館

今年も子どもたちと、冬に種をまき、麦ふみした六条大麦を先日収穫し、これから子ども達と麦茶づくりを計画しています。味噌も冬から子ども達が大豆から仕込みました。

保育参観、キャンプ、光の子祭と光の子文化的活動を保護者の皆様に支えられ、豊かな子ども達の文化的成長のために、育ての心から生まれる共育ち関係を深める夏へと力強く向かっていきたいとそう願います。



# 「とうちゃん讃歌」 <鳩の森>オリジナル曲

♪～～

共働きは、とうちゃんやかあちゃんが働いていることだ  
もちろん子どもは 保育園っ子  
のんびりしたい時間だって 保育園では  
バザーだコンサートだ認可検討委員会だと  
なんだ～かんだ～ なんだ～かんだ～  
次から次へと 集まりで  
たいへんさあ 疲れるさあ  
たいへんさあ 疲れるさあ  
だけど だけど だけど  
バサーでは 父ちゃんがいるから餅つきが出来るのさあ  
父ちゃんがいるから 焼きそばが出来るのさあ  
汗を流して 父ちゃんが頑張ったから  
焼き鳥屋も 綿菓子やも 盛り上がるのさあ  
行列ができるのさ

子どもが病気の時 そりゃ困るさ  
休みを続けて取るなんて 許されないもの  
夫婦げんかも起きるさ 朝まで持ち越す日もあるさあ  
だけど だけど だけど  
だけれど 助け合ったり たよりあったり 支え合って生きて行く  
皆で生きてる保育園は  
俺たち私達の気持ちに ぴったんこ

子育ては一時、大事な一時  
二人三脚かあちゃんと  
二人三脚とうちゃんと  
二人三脚保育園  
二人三脚鳩の森

今を大事に 今を大事に 今を大事に生きて行こう ～♪



「とうちゃん讃歌」 作詞：せぬましず子 作曲；高平つぐゆき

